

ず、研究者も少ないのが現状である。戦前の産報運動と戦後の労組運動とのつながりを認めるか否かについては、今後の資料発掘いかんにかかっているともしうことができよう。

(京都工場保健会)

中国古代医学に於ける 五行説について

家 本 誠 一

陰陽五行説は戦国来から秦漢の時代に流行した一ケの時代思潮である。政治の分野や倫理道德、更には日常生活のタブーに至るまで広く浸透していたといわれる。この時代に成立したと考えられる中国古代医学が、当時の流行思想をとり入れて、その医学の構築に利用したのは当然のことと考えられる。

通説によれば、中国古代医学は陰陽五行説を中核とする観念論的な医学であるという。この通説は正しいか、又、陰陽五行説がこの医学の中で如何なる役割を担っているか、この点についての考察は従来の研究には乏しいように思われる。

私は素問靈樞の文章に即して、五行思想がこの医学の中でどのような働きをしているかを考えてみたい。

素問靈樞の記述は二つの要素に分けるとわかりやすい。一つは古代の医師たちが経験し洞察し実践した純粹な医学的記録である。今一つはこの龐大複雑な内容を整理するための理論的枠組である。この枠組は先の医学的内容に対しては外挿的或は外在的なものである。

これには三つの原理がある、陰陽、天地人三才、木火土金水の五行がこれである。この三つの原理は無秩序でたんに使用されているわけではなく、医学を構成する諸々のジャンルの中の或る特定の部門に重点的に適用されている。例えば三才は病因論の中で病因の分類に主として使用されているように。但陰陽は寧ろ内在的な医学的概念として重要な意義をもっており、この医学の基本的原理であることを示している。

さてそれでは五行は医学のどの部門でどのような機能を果しているであろうか。これには二つの場合がある。一つは五行配当の利用であり、一つは五行相克の利用である。それぞれ適用されている局面が異なる。

第一、五行の配当は形態学的諸要素の分類と系統化に使用されている。五行配当は淮南子や呂氏春秋の月礼の記事

(年中行事と生気象学の結合)に見られるが、この模式を借りて蔵府経脈皮毛肌肉筋骨等の形態的要素を分類し系統化している。現代の形態学が呼吸器系統、消化器系統などと分類するように、この医学では五行の配当に基づいて系統化が行われているのである。例えば肝、これは肝藏自体を意呼するのは勿論である。同時に、肝と機能的に合同関係に在ると考えられている胆・筋・目・厥陰肝經・少陽胆經などの藏器組織も、一まとまりのいわば肝系統として、肝と表現されることがあるのである。そして、これに基づいて病気の分類や診断治療の実践が行われる。

このような五行配当による蔵府経脈の系統的結合は、季節・方位・風向・氣候というような風土条件と蔵府の特異的症候パターンによって媒介されている。この結合は近似的にもせよ客観的合理性をもっているように見える。したがって一度この配属関係が成立した後は、木火土金水の分類基準は取り去ってしまっても、それ自体の機能的関連系統として臨床的に活用できることになる。その有効性はこの関連の客観的合理性の程度による。

第二、五行相克は病気の経過の法則化と予後判定の法則

化に利用されている。典型的には素問玉機真藏論の次の文章に示されている。「五藏相通ず。(五藏の病が) 移るには皆次(第順序)あり。五藏に医あるときは則ち各々その勝つ所に伝う」と。肝の病なら木克土の關係で脾に轉移するといふのである。又、「病のまさに死せんとするや、必ず先ず伝行して其の勝たざる所に至つて、病乃ち死す」と。肝の病は金克木で肺に轉移したとき死ぬということになる。これが病氣の経過と予後の一般的通則だといふのである。

病氣の経過は時間軸に沿つて間(輕快)甚(重症化)のリズムを画く。この間甚のリズムも五行のそれぞれに割り当てられた時間的要素によって決定される。木に所屬する時間は季節なら春、日なら甲乙の日、一日の中では日出の時刻である。金は秋、庚辛の日、日暮の時刻である。そこで肝の病は相克關係によつて火の時期に輕快、金の時期に惡化、水の時期に持ち直し、木の時期に恢復するということになる。素問はいふ。「人形を(自然の秩序)に合(同)し、(この天人対応の法則を)以て四時五行にのつとつて治す。五行とは金水木火土なり。更々貴、更々賤(相生相克)な

り。(この相生相克を)以て死生を知り、以て成敗を決し、而して五藏の氣(の盛衰)、間甚の時、死生の期を定むるなり」と。

五行配当には尚真理が含まれているかもしれぬ。相生相克には合理性は認めがたい。これが一般の考えかと思ふ。しかしながら、古代において、疾病の経過と予後という經驗的現実を觀念論的にもせよ組織した力量は評価するべきである。又、科学的検討を必要とする。